

【14】 再び月面へ ―半世紀の空白を経て―

能登半島地震の混乱も冷めやらぬ 1 月 20 日に、日本の無人探査機「スリム (SLIM)」がなんとか月面に着陸しました。月面に探査機を送り込んだ国としては、(旧) ソ連、アメリカ、中国、インドについて 5 番目です。時を同じくしてアメリカの月面居住計画「アルテミス」に日本も参加することになり、数年後には日本人の月面上陸者が登場するようです。昨年、中国が月の裏側に月面探査車を走行させ、数年後にはやはり人間の月面居住を目指すとのことです。近年、にわかに月面が注目され始めました。筆者が、かねてから科学上の話題として不思議に思っていたことは、月面での人類の活動がこの 50 年全く進まなかったことです。アメリカのケネディ大統領の号令で、アポロ計画が進められ、1969 年に最初の 2 人の宇宙飛行士が月面に降り立ち、以後 1972 年までに都合 6 回計 12 人の宇宙飛行士が月面を踏みましたが、以来、52 年間、後に続く者が現れませんでした。月世界に基地やコロニーを造るとか、貴重な鉱物資源を採取して地球へ送るなんて話は全く忘れられてしまい、先進国アメリカの関心も、はるかに遠い火星の探査をはじめ、惑星の調査に移っていきました。

それにしても、現代の科学技術の発展とその進歩の速度は著しく、特にコンピューター関係の分野では文字通り日進月歩というのに、月世界旅行では半世紀以上にわたって停滞していたというのは科学技術史上の一大奇観と言えると思います。

その大きな理由は何でしょうか？

宇宙技術者でもない土木技術者の私が論じるのはおこがましいのですが、やはり人命に対するリスクがあまりにも大きいことだと思います。アポロ計画では、人工衛星の軌道上の宇宙ステーションでいったん中継し、そこから月へ出発するという方式が開発されていなかったもので、サターンという重さ 3 千トンのロケットで強引に月を目指し、最終的に 3 人の飛行士がわずかに数トンの帰還船で地球へ戻ってきたのです。米ソ対立という異常な状況下で、国家の威信がかかってなければ出来ない非常にリスクの大きい冒険だったのです。アポロ計画では、開発期間中に火災で 3 人の宇宙飛行士を失い実行に移されてからも、月へ 3 回目に派遣されたアポロ 13 号（最初の飛行はアポロ 11 号）では酸素タンクの爆発で危うく遭難しかけた宇宙船を地球から知恵の限りを尽くして指示・助言し、かろうじて 3 人の宇宙飛行士が帰還できたという大事故に見舞われました。3 人が助かったのは奇跡だとして、小説や映画になりました。いったん事故が発生すれば、全く救助の手段が無いという状況下で 7 回のミッションを送り出し、6 回は成功したものの 1 回は人身事故になりかねない重大事故を生じたわけで、平常時なら恐ろしくて実行できたものではありません。アメリカは成功し、当時のソ連はロケットの事故続きと、サターンに匹敵する巨大ロケットの開発が出来なかったことから、月を目指すことをあきらめ、競争は終わったのです。

今、再び月への関心が高まってきたのが、科学技術の発展による当然迎えるべき段階に達したということなら目出たいのですが、アメリカと中国との国家のメンツをかけた覇権争いでないことを期待します。それにしても、私がかろうじて 20 代の終わりに人類の月面着地第一歩をテレビにかじりついて見たのが、80 を過ぎた高齢になって再び話題になるとは、何とも不思議な感じがしています。